

## 手塚治虫 鉄腕アトムの正義 **ただひとつ 翻せない主義**

手塚治虫さんは次のように述べています。

『自分は戦前から戦中期にかけて育ったので、漫画というと“よい子のために”ということで、わりと人畜無害のものを描き続けていた。当時の大人は漫画を目の敵にし、ピストルが出たわ、刀が出たわ、言葉が悪いわ、とことごとく悪書の槍玉だった。ところが今や大人までが漫画を読み始めると、どうだろう。70年安保の揺れ動く世相の中、体制からドロップアウトした主人公像、暴力…等過激な行為を肯定的に取り上げる漫画が雑誌に登場すると…“よい子のための”漫画など生温いという訳だ。「手塚の漫画は古くてダメだ」という“三文漫画評論家”を相手にしても始まらないが、“ナウな感覚”が漫画の生命というのなら、やむを得ずそれらバイオレンスな表現も身につけなければならない。自分は何度も“転向”した。割り切る前の自分はノイローゼの固まりのようなもので、ひどいコンプレックスに陥り八つ当たりし、ジレンマの極みに達し、ついに大勢に迎合する。当然、従来のファンは罵倒し、裏切ったと言って去っていく。しかしただひとつ、殺されても断じて翻せない主義がある。それは戦争はご免だということ。反戦テーマは描き続けたい。そういう点では、裏切り者になりたくない。』…手塚さんは、激しいジレンマを感じながらも執筆を続けていたようです。

### **原体験**

1944年夏には強制修練所に入れられ、9月からは軍需工場に駆り出される。勤労奉仕中に頭上で焼夷弾が投下されるも九死に一生を得る。…この空襲は手塚さんの原体験ともいえるべきものとなりました。また手塚さんは戦後間もない頃、酔っ払った米兵にわけもわからず殴られ強いショックを受けたことがありました。手塚作品には天使と悪魔の二面性や、異民族間、異文化間の対立や抗争などを主題にしたものが多くみられるのは、このような原体験に基づいています。そして、手塚さんは自らの戦争体験によってもたらされた「生命の尊厳」を自身のテーマの一つとして挙げています。また、手塚さんは次のように述べています。…『漫画を描く際にプロ・アマ、更には処女作であろうがベテランであろうが描き手が絶対に遵守しなければならない禁則として、“基本的人権を茶化さない事”を挙げ、どんな痛烈且つどぎつい描写をしてもいいが、「戦争や災害の犠牲者をからかう」「特定の職業を見下す」「民族、国民、そして大衆を馬鹿にする」だけはしてはならない』と…

### **「いのち」に関わるもうひとつの背景**

戦前の寶塚（宝塚）の中心に宝塚大劇場、宝塚ファミリーランドの前身宝塚新温泉、宝塚ルナパークなどの行楽地が立ち並び、一種の異空間を形作っていました。このような人工的な近代都市の風景は手塚の作品世界の形成に大きな影響を及ぼしました。また、附属池田小時代の同級生の影響を受けて昆虫や科学、天文学に興味を持つようになりました。手塚家の庭は昆虫の宝庫、周囲の田園地帯にも虫が豊富にいました。

そして甲虫のオサムシの存在を知り、「手塚治虫」を使い始めました。さらに戦争体験や育った環境の他、ディズニー作品が好きだったこと、阪大医学部卒で生命に詳しいことも影響していると考えられます。

『僕は宝塚に住んでいたんですが、学校の帰り道に寂しい沼があって、そこを通過して家に帰るんです。そこを通る夢をよく見ました。沼地の横で得体の知れないものがブルブルふるえながら僕を待っている。自分の家へ連れてくる。逃げ出すと困るから雨戸を閉めて、ふすまを閉めて絶対に出られないようにして、僕と物体が向かいあったところでたいてい夢がさめてしまう。その間も何だかわからないけどそいつがいつも変わるんです。女にもなるし、男にもなるし、化け物にもなる。常に動いている楽しさみたいなものがある。動いているのが生きているのだという実感があるわけです。変化しながら進化しているとか、何かに働きかけようとしているとか、つまり、一つのアクティブな感じを受けるんです。で自分は、それを見ているだけなんです、相手は何かの形で次々に流動しているんです。』 1950年頃の手塚さんはこのような「不定形で変身をし続ける生命の原型」を、描線に込めて漫画の全世界に拡張したことで密度の高い作品を生み出した。しかし劇画の影響などから描線の自由度が失われると、描線では実現できなくなった生命観を理念として作品のテーマとしていき、『火の鳥』に現れるような汎生命思想が描かれていくのです。



オサムシ

## **手塚作品の貢献と影響**

「ぼく（やなせたかし）が学んだのは、手塚治虫の人生に対する誠実さである。才能は努力しても、とてもかなわないが、誠実であることはいくらかその気になれば可能である。もちろん遠く及ばないにしても、いくらかは近づける。手塚治虫氏はその意味でぼくの人生の師匠である。」。やなせは「千夜一夜物語」前後を境に、「不思議なメルモ」「鉄腕アトム」など子供向け作品を描いていた手塚が大人向け作品を作ることが増え、やなせが全く逆に子供向け作品を作ることが増えたことを『運命の交錯』と表現しています。また、手塚作品は国内のみならず海外にも、また漫画界のみならず各方面にも大きな影響を与えました。

☆鉄腕アトム…平均視聴率30%を超える人気を博し、その後、世界各地でも放映されました。米題は『ASTRO BOY（アストロ・ボーイ）』。日本のロボット工学学者達には、幼少時代に『鉄腕アトム』に触れたことが、志す契機になる等、現在の日本の高水準のロボット技術力にはこの作品の貢献が大きいともいえます。

☆リミテッド・アニメ…総勢10名にも満たないスタッフでは毎週テレビ放送用にフルアニメーション番組を制作することは作業量から不可能で、絵の枚数を大幅に削減するリミテッドアニメの手法を必要に迫られて編み出すに至りました。アニメ監督の杉井ギサブローは、手塚治虫が低予算でも作れるリミテッド・アニメの手法を日本に定着させなければ日本は世界のテレビアニメ生産国にはなっていなかったと語っています。

## **運命の交錯**

やなせ、手塚、まど…3氏ともに「正義」や「いのち」を生涯のテーマとしています。共通点は、幼少時の原体験や悲惨な戦争体験が反映されていること、低迷と復活の中、作品を作り続けてきたこと等です。

昭和40年前後、手塚さんらが推し進めたストーリー漫画が人気になる一方、やなせさんが元々得意としていた大人漫画・ナンセンス漫画は激減し深刻な状況でした。やなせさんは舞台美術制作や放送作家、グラフィックデザインなど様々な分野に仕事を求めていかざるを得ませんでした。しかしこれが思わぬ転機や恵みとなりました。人との繋がり、そのまた繋がりを経て、作品が生まれヒットするという現象に至ったのです。やなせさんのもうひとつの「運命の交錯」…弱小企業だった頃の山梨シルクセンター(現・サンリオ)の社長辻信太郎さんが、「漫画集団」の展覧会に来場し、やなせんさんにグラフィックデザイナーとしてのオファーを入れました。当初やなせんさんは菓子のパッケージデザインを手掛けましたが、1966年にやなせさんが処女詩集「愛する歌」を出版しようとした際、辻さんが「それならウチで」と声を掛けました。そして「愛する歌」はサンリオの業績を押し上げるほどの大ヒットを記録しました。サンリオが出版事業に進出するきっかけにもなったのです。

また手塚さんにおいては、劇画の台頭による苦境・心身の疲弊や手塚プロの倒産で、会社・個人とも莫大な借金を抱えていた時期がありました。この絶体絶命の苦境を救ったのは、ベビーカーで有名なアップリカの創業者葛西健蔵氏でした。手塚さんも人との連鎖的な繋がりをもって助けられたのです。

また、昭和40年～42年にかけて、やなせさんはNHKの「まんがの学校」という番組に出演されていました。この番組ではやなせさんは講師という役割で、クイズの出題や答えを漫画でにこやかに解説しておられました。この時分のやなせさんは、漫画家としては冬の時代でした。手塚治虫さんらが推し進めたストーリー漫画が人気になり、やなせさんが所属していた「漫画集団」が主戦場としていた「大人漫画」「ナンセンス漫画」のジャンル自体が過去のものとなされ、作品発表の場が徐々に減っていく深刻な状況でした。したがって、本業以外に舞台美術制作や放送作家、グラフィックデザインなど様々な分野に仕事を求めていかざるを得なかったのです。しかしこのことはやなせさんにとって、思わぬ転機や恵みとなりました。人との繋がり、そのまた繋がりを経て作品が生まれヒットするという現象に至ったのです。

作品には作者の生き様や想いが奥深く秘められています。そして、心に響くのは有名作家に限らず、児童の活動や作品、学習記録も同様です。秘められた生き様をどう見つめ、汲み取るか…感じ取り、読み解く力を私たちも身につけていきたいですね。

(参考文献：Wikipedia「手塚治虫」)